

語り手としての堀口大學

東 順 子

明治四十三年の春、与謝野寛宅で新詩社同門の縁を結んだ堀口大學と佐藤春夫の交友は、昭和三十九年五月六日に佐藤春夫が先逝くまで続いた。堀口大學は新詩社入門後、短歌から創作詩を始め、外交官である父の任地に従って海外に在る頃より翻訳詩を手掛け、大正十四年には文学史のエポックの象徴ともいえる訳詩集『月下の一群』（第一書房刊）を得た。以降、創作詩・翻訳他、「オルフェオン」などの文芸誌を主宰し、昭和五十六年三月十五日長逝する。一方の佐藤春夫は短歌から創作詩・小説を興す傍ら、絵画への志向は二科展に度々入選を果たす結果をもたらした。大正・昭和と小説を中心とした活発な執筆活動はその死まで続いた。この二人の交流を伝える随筆や小説があり、若き日の出会いから晩年までのエピソードは、創作を支えていた。詩人や作家の随筆や回想は作品研究の側面補足やテキスト解釈の資料として扱われることが多いが、ここでは「随筆自体を読む」ところから始めたい。特に本稿では「二顆の陶印」を巡る随筆と佐藤春夫・与謝野寛に関する回想を中心に考察を進める。

1

「二顆の陶印」のエピソードは、与謝野晶子による与謝野寛の形見分けに端を発する。昭和十年、与謝野寛の葬儀に門弟代表として弔辞を献じた佐藤春夫に、後日晶子から一文を添えて二つの印が送られた。一つは森鷗外作の「ゆめみる

ひと」もう一つはそれに書体を真似た「与謝野寛作の「永く相おもふ」という晶子の手紙に反して、春夫のもとに届いたのは「ゆめみるひと」の印の他、「永く相おもふ」ではない石印であった。形見ゆえに、手紙の内容と実物との相違を尋ね出せずにいたらしい春夫は、昭和十六年に晶子の逝去によりその機会を失っていた。その時の経緯を含めて、身辺に材を求めた随筆集『慵齋雜記』（千歳書房）が昭和十七年十月に刊行された。この『慵齋雜記』に陶印の印影が掲げられていた。

一方、大學も与謝野寛の形見として創作手帳などの他に一つの印を送っていた。当時疎開先の越後高田にいた大學は、手元の印影を春夫に送る。それが「永く相おもふ」の印であった。この陶印がやがて春夫のもとに揃うことになる。その情景は後の昭和二十四年名「改造文芸」一月号に発表された春夫の『「永く相おもふ」——或は「ゆめみるひと」——』よれば、先の手紙による確認の後、大學の疎開先を訪ねた折になされたことらしい。

……前略……机に向かつてゐた彼はわたくしの姿を見ると机の引き出しをあけて何やら探し出したと思つたら、一つの陶印をさして、「さあ、これです。」と一言、見れば刻こそ違ふが、「ゆめみるひと」と全く同じ形の青釉・赤土の陶印「永く相おもふ」であつた。或は寛先生が鵬外先生と同じ機会に同じ場所で同様の素材を利用して作らせたものかと思ふ。しばらく見入つてから、それを堀口に返さうとすると、堀口は押し返して、「それはもう君のものだ！」とわたくしにそれを譲らうとするのだつた。……中略……わたくしたちの友情を祝した晶子夫人が、更にかういふ方法でわたくしたちの友情を完うさせてこの印の文言をわたくしたちの間にすっかり捺して置かせやうといふのであるのか、わたくしは晶子夫人がわれわれをかへり見て微笑しかけるのかのやうな気がした。

以降「二顆の陶印」は春夫のもとにあり、春夫の覚書を記した桐箱に二顆揃って収められ愛蔵されることとなる。そして、春夫の形見となり、現在は大學の形見として晩年を過ごした書斎の机上にある。この顛末を大學は昭和五十四年五月「太陽」第十七巻第五号（平凡社）に「二顆の陶印」として寄せている。

寛先生ご他界のあと、僕も春夫君同様、晶子先生のおん手づから、寛先生のお形見の品とて、「爆弾三勇士の歌」の第一稿から第三稿までと、お歌作りのご旅行に持ち歩きになった小型の手帖一冊、それにお手作りの珍宝ですよとお口添えのあった陶印、「永く相おもふ」の一顆。……中略……涙にむせぶ思いで拝領したことを覚えていますが、陶印の片われが、春夫君の手もとに在るとは、神ならぬ身の由もなく年を経た。

……中略……こうして、明治の文豪森鷗外先生と大詩人と謝野寛先生の合作とも言えそうな一對の陶印は、在るべき人の掌中に納ったのであった。

この「二顆の陶印」を巡るエピソードは、主役たる陶印が「森鷗外作・与謝野寛作」という文学史的付加価値を持ったものであり、登場人物もまた実際の小説家・詩人であるだけに印象に残るものである。大學も何度かこのエピソードを語り、書き残しているが、多くの場合、春夫との出会いとなった与謝野寛への回想から、春夫の死によって完了したこの世での友情、残された悲しみについて言及する。その過程があって初めて、晩年まで「与門」という二字を署名に冠して与謝野寛に対して師たる礼を尽くした大學が、「晶子先生のおん手づから」下さった形見の品を春夫に送るドラマになるのである。二人の出会いの光景も大學の随筆などに多く登場するが、その一例を挙げる。

明治四十三年（一九一〇）陽春のころ、春夫君と僕は与謝野寛先生の紹介で相知った。場所は駿河台西紅梅町二のご自宅、新詩社の楼上だった。満で数える頃の流儀ですると同年生まれのふたりは十八歳だ。双方の父親をご存じの寛先生はその時、たまたまお訪ねして落ち合った僕らを引き合せて下され、

「ひとりは南の方から、ひとりは北の方から、ふたりとも詩歌に導かれて此所へ来たが、ふたりとも同じように文字を尊ぶ家の生まれだ。お互いにはげまし合って勉強し給え。」と言って下さった。そばに居られた晶子先生も、「ひとりは北、ひとりは南、育ったところはあべこべですが、却ってこういうおふたりが、よいお友だちにお成りになれるかも知れませんか。」と、口添えして下さった。その後、今日まで五十四年、只の一度のかげりもなく、人も

羨むこの親交は続いている。^①

これは昭和三十九年五月『現代文学大系27』（筑摩書房）月報のために書かれた「親交半世紀」からの引用である。刊行期日を見ればまさに、佐藤春夫の逝去とかさなっている。健康に多少の不安を覚えていたようでも、突然の心臓発作による春夫の死を予感していた訳ではないが、大學は「親交半世紀」をこう結んでいる。

僕は思うのだ、春夫君と僕とは、もとこれ一卵性双生児だろうと、一人痛めば一人も泣く。

僕は思うのだ、春夫君と僕とは、もとこれシャム兄弟だろうと、詩という臓腑の一部をお互いの腹中に共有している二人だと。切りはなしたのでは、どちらも生きてはいまい。

死より他の理由で、親交の断たれる筈はないと確信する大學の「親交半世紀」は奇しくも春夫を送る言葉となる。春夫の死によって親交は途絶えたが、半世紀をもって育てた友愛は大學の創作を支えてゆくこととなる。

2

大學と春夫の「二顆の陶印」を巡るエピソードは当然「寛先生」の存在が常に意識されている。なにより、二人の友情の礎は与謝野寛によって据えられたものであると共に、大學は父・九萬一の親友であった与謝野寛に絶対の信頼を置いていたからであろう。^②

新詩社に初めて訪ねた日のことも、大學は与謝野寛との会話を再現する形で書き残している。昭和五十五年五月に刊行された関容子『日本の鶯——堀口大學聞書き——』（角川書店）には左の通りである。

——僕と寛先生の出会いはこうよ。

僕が父の親友の彫刻家、武石弘三郎という人のお宅に下宿していたことがあったの。牛込甲良町というところだね。この人が鷗外先生の胸像を制作したことがあって、その像を遊びに来た佐藤が見ているのだから、いろいろと因縁は深いのねえ。

……中略……それでこの牛込から僕がはじめてお伺いした時、いきなり先生がおたずねになったの。

「君、故郷はどこかね」

「はい、新潟県の長岡です」

と申し上げると、

「あ、そうか。すると長岡には堀口という姓はたくさんあるんだね」

とおっしゃるから、

「いえ、家中で堀口は私共だけです」

とお答えすると、先生はキツとなさって、

「そんなことはない」

と、おっしゃるので、僕もキツとなってね、

「いいえ、間違いありません。町家にもないようですが、家中では殊に私共だけです」

「そうか。それじゃ君、堀口九萬一という男を知っているか」

「ハイ、存じております」

「それ見給え、ほかにもあるじゃないか」

「ハイ、私の父でございます」

と言うと、ハツとなさって、

「ハーア、そうかあ。九萬一さんが幼児とおっしゃっていたのは、君のことだったのか」

とおっしゃってね。そりからは話の糸口がほぐれて、特別に目をおかけ下さるようになりましたよ。

この引用は大學が聞き手・関容子に語ったものの活字化である。引用では会話間のつながりがいかにも説明調に見えるが、大學の語りの間や口調を窺うことができる。大學にとって新詩社入門はまさに詩人への第一歩を印した記念の意味合いがあり、深く印象に残っていたのであろう。この会話から、聞き手は与謝野寛と堀口大學の薄からぬ縁と結ばれた師弟の絆とを納得する。

「話し言葉」つまり「話語」には、「音声表現による表情・感情」が伴われており、文字表記による言葉にはないニュアンスが含まれている。同じ話題であっても、話し手の気分や声質によって聞き手にもたらされる印象も変化し、その話題のどこに力点を置くかによっても受け取り方に差違が生じる。話し手が聞き手に十全に意味を伝えることは難しい。その為に話題の聞き所が明確になるよう、話し手は言葉や構成を考えてゆく。巧みな語り手であるためには、言葉・声色・間など様々な気配りと訓練が必要なのである。

大學先生は、寛先生とのこの件をお話になるのがとても好きだ。

こう書くは失礼と思うが、私はこのお話を、いろいろな人と同席もしたが前後四回伺った。

これも前出の関容子の一文である。このエピソードはまさに大學の「おはこ」である。「おはこ」はそれらしいスタイルが出来上がっていないなければならない。そうなるまでに、何度大學はこの件を話したのだろうか。一つのスタイルを持ち、聞き手に快く届く間をもつことは、単なる事実の再現である必要はない。ここで聞くべきことは日時や文言の正確さではなく、思い込みが会話の展開でめぐれてゆく過程と人間関係なのである。昭和五十年代の大學晩年近くに伺候した関容子が「前後四回」なら、それ以上の回数を重ねて語られているはずである。その時々聞き手は語り出す大學が、「与謝野寛先生と対面する少年堀口大學」へと戻る瞬間を目の当たりにし、生前の与謝野寛を知らずともその口調をうかがうことが出来たであろう。思い出を語る時、話し手は回想の中にある全ての情景を、人物を一人で演じ、解説

しながらその時に自身が感じた印象も同様に伝えなくてはならない。それは、個人的な思い出をなるべくなら自身と同じ形で受け取って貰うためである。何度話していても、話語そのものは残らないのである。会話として発したものは記憶には残っても、人の記憶にはVTRのように第三者に提供できる映像再生機能はない。他者の記憶を見ることは不可能なのである。現在のように記録装置として様々な機材が用意されていても、過去へ立ち戻って記録を得ることはできない。過去は他者の記憶から探り、残されたものから推測してゆくしかない。経験者と話し手が同一である時の言葉は、体験から発した直接の言葉である。経験者を失えば直接の言葉も失われる。そこで話し言葉に付随していたニュアンスも失われるのである。

3

大學は果たして「巧みな語り手」であつたのだろうか。

大學に許された天寿、それは師も友も多く見送ることに他ならない。残された者が思い出と追想を語る。語られるのは思い出すに足るもの、語るに相応しいもの、他には、聞き手に乞われてなど基準は均一ではないが、あくまでも自身の記憶から手繰られるものである。語るには相手があり、その場の状況や雰囲気にも左右される。聞き手のように、殊たる話し手と聞き手が明確に別れている場合は希である。通常その場にある全員が話し手・聞き手を兼ねていることが多い。この転換を持つ場では、一方的な語りを聞き手が切り返し、細部を訊ねるなど話の構成など次に語るまでの推敲過程のような役割を果たす場合がある。繰り返すことが話の形を作り上げてゆく。

大學が春夫のことを語った「佐藤春夫追悼講演」（昭和三十九年六月二日於・慶應義塾大学）が昭和六十一年三月刊『堀口大學全集8』（小沢書店）に収録されている。この追悼講演の場所は互いの母校であり、聞き手は、友であり語り手・大學が春夫と思い出を語るのを待っているのである。待たれている語り手は、なれそめから順を追って二人のエピソードを披露してゆく。聴衆を持つ故に、講演として構成された内容となっており、死者である春夫への配慮も働いて

いる。その中から、「聞くこと」に関する部分を引用する。

ところで、私どもが慶應義塾の文学部へ入学したのは、その中学を卒業した明治三十四年の九月からです。……中略……どうもその頃の私どもは学ぶことよりも作ることに熱中していたようです。やっぱり青春というものは、今でもそうでしょうが、急ぐんですね。何か自分たちの使命が早く完成しないことには落ち着かない……中略……

それで佐藤君の話に戻りますが、彼はその頃から非常に夢想の力が豊かでした。会うたびに小説のプロットを話してきかせる。これが非常に面白い。もとよりロマンティックなもの、それから美的生活者の夢ですよね。聞くとびに感心しまして、「これは素晴らしいから是非書くように……」、「うん、書く」と言うのですが、その次に会うとまた「この間の話も面白かったけれども、また一つ考えた、これはどうだ」なるほど聞くと、その方がいっそうまたいいんです。「ああ、そいつは素晴らしい、これを書き給え」。こんなわけで、佐藤君は何年も何年もそういうプロット製造チャンピオンだったんですね。しかし、なかなか筆を執らない。

この当時のことを大學は後に「佐藤には四、五年の「語る小説家」だった時代」、「僕にはその「幸福な聴き手」の権利」としている。大學はまだ春夫が「語る小説家」であつたうちにブラジル公使であつた父の元に呼び寄せられてしまい、「幸福な聴き手」を全うすることはできなかったようだが、若き春夫の文字以前の物語のいくつかを聴いていたのだろう。聞き手であつた大學も「語る小説」の細部には言及しない。この部分は思い出に含まれてはいるが、その再現は語り手・大學の目的ではない。語り聴かせる春夫と聞き惚れる大學の姿を描きだすことが主眼である。

同じ追悼講演の中に、一時帰国した大學が春夫と詩と言葉に関して議論したことに言及しているところがある。語り手と聞き手だった二人がともに書き手となってから、お互いの作品を認めた上で議論の端緒が開く。

丁度、関東大震災のあった年のあの震災の数日前でした。私と佐藤君は大森の山の上の西洋風のホテルに一緒に暮らしておりました。それである晩、芝生の上に椅子を持ち出していろいろと詩のことを話しておる間に、たまに二人の詩の言葉が非常に違うということが問題になりました……中略……「僕は君の使っているようなああいう言葉では……中略……自然に詩情が古びたものになってしまつて、勿体ないような気がするが……」。すると春夫君は「うん、それはそうかも知れない。確かにそれはそうだろう。しかし、君の使っているようなああいうしゃべり言葉、それも非常にくだけたしゃべり言葉、口語というよりも、もっとくだけたしゃべり言葉、ああいうものは不安で、僕は詩は書けない。ああいう言葉はまだ定着しておらんのだよ」。……中略……私は「ウン、冒険かもしれないけれども、やっぱり現代に生きる以上は、今の言葉で、自分の言葉で詩が書きたいんだ」「そうか、それじゃあやってみたまえ」というようなことでしたが、最期の春夫君のその「では、やってみたまえ」という言葉に一抹の不安と同情の心を、私はその時汲み取ったことを思い出します。

ここで大學は語り手となることを宣言しているようでもある。「しゃべり言葉」で書くとは、語ることではないだろうか。文字として書かれる言葉に話し言葉のもつ複雑なニュアンスを与えることがいかに困難であるかを、小説家たる春夫が充分理解しているからこそ、大學への配慮をこめて「言葉への意識」を語っているのであろう。

大學が「しゃべり言葉」に拘る姿勢を貫いたことは、大學の晩年から逝去後に渡って刊行された『堀口大學全集』（小沢書店）各月報や追悼特集を組んだ昭和六十二年三月の『別冊かまくら春秋』（かまくら春秋社）などに寄せられた中にも度々言及されている。新作に限らず、改稿された旧作を朗読していた様子がうかがえる。新詩社で行われていた朗詠の節であったとも回想されているが、文字を言葉として声にのせることで、血脈を通わせようとしていたのであろう。読みかつ聞く——大學にとって「読む」とは、目による黙読だけではなく音声によって読むことを求めているのである。大學が求めた詩情は「今の言葉」、耳から聞いて理解可能なものではなかったろうか。話し言葉には、発言を促す感

情や表情・身体表現・タイミングが混然となって伝わるのである。文字化しえないニュアンスを書き言葉に付加するために、大學は語るのである。話し言葉は、言語を持つ者同士が、その背後にある伝統・文化・習慣などを差違をも理解しうる可能性を有しているのである。大學にはフランス語というもう一つの言語があるが、それも又、日常生活に使いこなされた言葉である。「今の言葉」として領域を確認された言葉として大學の内に蓄えられてゆく。話し言葉は変化を恐れず、時代に消えるもの残るものの判断は性急には下せない。それだけに、大學が読者に聞くことを求めたのは、自身の言葉・表現の鮮度の判断を委ね、またその次の言葉を探る意識の現れではなかったか。

付記

平成十一年五月十三日、葉山の堀口大學本邸に於いて、高橋すみれ子氏の御好意により貴重な「二顆の陶印」の印影を始め、多くのご示唆を頂いたことに末尾ながら深謝申し上げる。

また、新潟県長岡市立図書館に一括収蔵された千頭将宏氏の堀口大學著作・原稿などのコレクションの活用も含め、今後さらなる考察を進めたい。

脚注

(1) 二人の出会いについて、春夫は次のようにも書いている。「堀口大學とは、その以前与謝野晶子夫人のひき合わせで知り合っていたのだが、偶然、入学試験の日一高の庭で顔を合わせていた。」昭和三十八年八月『詩文半世紀』（読売新聞社）

(2) 『日本の鷲——堀口大學聞書き——』（前出）には「——何しろ寛先生と父とは、京城で親しくしていたからね。先生は明治二十八年の四月に鮎飼房之進という人が韓国政府学府省の乙未義塾の総長になった赴任した時、招かれて渡韓していらっしやる。分校の桎洞学堂の主任ということだね。二十二歳。お若かったね。父は三十歳で、領事補として京城にいました。……中略……その年の十月に、「王妃事件」というのが起こって父もその嫌疑を蒙ったのだが、外交官には治外法権が適用されて、ひとまず日本へ送り帰された。当時は広島獄舎ですよ。寛先生はすぐそのあとの船で追いかけていらっしやっ

て、それはもう行き届いたお世話をして下さったらしい。」とある。

「王妃事件」は、「閔妃事件」と称されるもの。当時排日派の首謀と見なされていた李太王の妃・閔氏を王宮内で害した事件である。この首謀者として堀口九萬一の名が挙がっていた。この九萬一を案じた与謝野寛の書簡が残っており、その宛名は大學となっていた。読み下しが『日本の鷲』に収録されている。「九萬一殿のこと既に新聞紙上にてご承知と存じ候。此の度のこと、いつに無実の災禍、何共お気の毒と存じ候へども、万事は友人の間柄、小生において相引受け申し候間、決して決してご心配なきやう、皆々様に願ひ奉り上げ候。尚御用有之候ば、小生へ御状相成りたく候。萬、取敢ず申し上げ候也。十一月一日、堀口大學殿追伸小生は京城より同行の友人に有之候。万事九萬一君よりご依託相成り居り候」当時、大學は幼児であり互いに面識はないままであったらしい。